

地球惑星科学科 / 専攻における女子学生の現状と展望

Female students studying earth and planetary sciences in Japanese universities

山中 大学[1]

Manabu D. Yamanaka[1]

[1] 神大・自然

[1] GSST, Kobe Univ

<http://www.ahs.scitec.kobe-u.ac.jp/~yamanaka/>

女子の大学・短大進学率は 1990 年前後に男子に追いつき、現在では男女とも 18 歳人口の約半分が大学・短大に進学している。短大を除いた大学の学生に占める女子の割合も 1990 年代に倍増して、現在では約 4 割となっている。学部卒業者の大学院進学率も近年の大学院重点化によって既に 1 割を超えているが、大学院生に占める女子の割合も約 3 割に達している。理学系に限ってみると、現在は大学学部生・院生の約 2 割が女子であり、さらに分野別で見ると、以前から比較的高かった化学・生物系の女子学生比率（約 3 割）に、近年は地球惑星科学もかなり追いついてきた。

地球惑星科学は野外観測・調査の占める割合が高いという特徴があり、それが男子に比べて体力面や安全面で不安のある女子の進出を抑えてきた大きな理由であった。しかるに近年は、並行して数値解析・数値実験の比重が飛躍的に増したことも無視できないが、野外観測・調査においても女子学生の進出が目覚ましい。勿論、この背景には、社会の制度や価値観の変化が大きく反映している。かくして、教員の側で指導学生のテーマを決めるときなどに、その性別を意識する局面は殆どなくなってきた。しかし教員あるいは研究者、すなわち教わる相手でありかつ就職先となる側の女性の比率は学生に比べるとまだかなり低く、そのことが女子学生・院生に男子と異なる意識を依然として持たせているかもしれない。

一方、近年の地球惑星科学の傾向として、まさにこの合同大会に象徴されるような、学際化・総合化がある。この点においても、かつては女性は男性に比べて視野が狭くなりがちで実力を発揮しにくいと言われたこともあったが、今はむしろ生命を生き育てる女性ならではの自然観・環境観こそがこの分野のさらなる発展をもたらしつつあることも事実である。つまり、男勝りの女性が地球惑星科学者になった時代は終わり、女性らしさを前面に出した科学者が地球惑星科学のさらなる発展のために求められる時代になりつつあるのである。このことを考えると、今後はむしろ、女性研究者が女性らしさを十二分に発揮できるような指導や研究環境が、教員や学界の側に求められていると言えよう。